特集 人と生きる

平和といのち

あらがいようのない大きな力によって、自分や大切な人の命を翻弄された人たちがいます。ロシアによる軍事侵攻や第二次世界大戦―。母国への思いや過去の記憶を胸に、市内で暮らす2人の姿にスポットを当てました。

つながりで前向きに

ウクライナ避難民
ニキチェンコ カテリナさん（34）

ウクライナ東部のドネツク州出身。日本が避難民を受け入れていることを知り渡航を決断。昨年10月、市内に避難してきました。

募金活動に参加するニキチェンコさん（右）

シアと国境を接するドネツク州で命の危険にさらされたニキチェンコさんは、避難を決意します。家族は体調の不安からウクライナを離れられず、独りで母国を後にしました。避難先は、落ち着いて過ごせる場所を望み、自然が豊かな厚木市を選びました。

厚木に到着した日、サポートに当たる市の職員らを前にニキチェンコさんは、美しい街が壊されたこと、故郷に残る家族のことを語り、涙を浮かべていました。

一歩ずつ前に

厚木で暮らし始めた頃、言語や文化の違いに不安を抱いていたニキチェンコさん。自宅で仕事に打ち込み、多くの時間を一人で過ごしていました。翌月になると、市内で2人目となるミコラエヌコさんの避難が決まりました。自然が好きな2人は、大山に登ったり、飯山白山森林公園を散策したりと、一緒に出かけることが増えていきました。3カ月後、ミコラエヌコさんが家庭の事情で母国に戻ってからも、ニキチェンコさんは変わらず毎週のように森林公園を散策しています。「ウクライナは自然が美しい国で、2千㍍級の登山もした。厚木周辺だけでなく、全国各地の山に登ってみたい」と、柔らかな表情を見せるようになっていきました。

広がるつながり

厚木に来て半年が過ぎると、少しずつ地域や人とのつながりが増えていきました。その一人である杉山さんとは、手芸だけでなく、市外に河津桜や雪化粧の富士山を見に行くなどの交流を続けています。「特別な援助はできないけれど、楽しいことをしている間なら、つらさを忘れられるかも」と、寄り添う杉山さん。好きな事に触れる時間が増えたニキチェンコさんは「杉山さんのように、つながりができてうれしい。声をかけてくれて感謝している」と笑顔をのぞかせます。

母国と厚木への恩返しを

昨年11月、自身の誕生日の時、戦禍の中、母国に残る90歳の祖母からプレゼントにとピアノを演奏する動画が送られてきました。ニキチェンコさんは、真剣なまなざしでその動画を見続けました。「この状況が一刻も早く終わってほしい。そして母国でまちづくりの手伝いがしたい」と力を込めます。一方「厚木の皆さんに、たくさん支えてもらい助かっている。高齢者や子どもたちなど、何か自分にできることで恩返ししたい」と話します。

母国への思いを胸に、好きな事や人とのつながりに支えられながら、ニキチェンコさんは今も厚木で暮らしています。

裁縫しながら笑顔を見せるニキチェンコさん（左）と杉山さん

テーブルを囲って談笑する

仲間と笑い合う楽しみ

戦争体験者　上本 孝則さん（92・恩名）

東京で生まれ、軍に勤務していた父と共に広島に移る。1945年8月6日、当時14歳の中学生だった上本さんは、爆心地から3㌔離れた自宅で原子爆弾による被爆を経験しました。

老人会のグラウンドゴルフを楽しむ上本さん（右）

「入れ！」「あー曲がったな」「ナイスパー」。スポーツを楽しむにぎやかな声が、広場に響き渡ります。仲間と共にグラウンドゴルフで汗を流すのは、上本孝則さん。生き生きとした表情でクラブを握り、コンコンと楽しげな音を鳴らしています。

体験を後世に

上本さんは68年前、転勤を機に広島県から厚木市に移り住みました。13年務めた会社を退職後、市内で中華料理店を開き、長く仕事を続けてきました。懸命に働き、かつての体験を思い返すことはありませんでした。しかし、2年前の8月、上本さんはある思いに駆られ、4200文字に及ぶ手記をしたためました。

（手記・抜粋）

本日は8月6日です。早朝からラジオ・テレビで広島の原爆投下の日であることが流れてくる状況に、14歳のときの記憶を記述しておかなければという気になりました。90歳になり、人生の終点もそろそろかという思いに駆られてでしょうか。今まであの悲惨な記憶をよみがえらせたくなく、他人に話すことは決してなかった、あの忌まわしい出来事を伝えたい…。

昭和20年8月6日午前8時過ぎ、ひととき前からB29特有の爆音を耳にしていましたが、いつもの偵察飛行だろうと思い込んでいました。中学2年生の私は、学徒動員で工場での作業をしていましたが、その日はぜんそくの発作を起こし自宅にいました。苦しさを和らげるため部屋の窓から庭をのぞいた瞬間、この世のものとは思えない閃光を目撃し、その後、数分間の記憶はありません。気が付くと、畳はめくれ上がり、ガラスの破片が山になり、家の中はメチャクチャでした。妹と母親の安否を確認した後外に出ると、北西の空を覆いつくすキノコ雲があり、ぼうぜんとしました。

2～3時間過ぎた頃でしょうか。爆心地の方から、全身にやけどやけがを負った人々が逃れてきました。衣服は焼け破れて肌が露出し、焼けただれた皮膚はゆでたジャガイモの皮をむいたようで、地獄にいるのかと見まがう光景は、目の当たりにした者以外には想像もできないと思います。我が家にも、親戚や知人が避難してきました。16歳の少女は、全身やけどで息も絶え絶え。こんなむごい姿は、何歳になっても脳裏から離れません。本当に悲しくて。彼女は痛みや苦しみの中、数時間後に亡くなりました。その夜、近くの小学校の校庭では山と積まれた屍が焼かれていました。今の平和な時代に、こんな想像ができるでしょうか。

上本さんは、書き上げた手記を周りの気心の知れた人や、家族などに配りました。読んだ人たちからは「戦争の悲惨さを知れて、平和で幸せな暮らしのありがたさを感じた」という声が寄せられました。

今が一番幸せ

上本さんが初めて手記をしたためたのは、80歳の時に入会した地域の老人会「しあわせクラブ恩名福寿会」の皆さんです。飲食店を閉めた頃に友人の誘いで入会し、週3回のグラウンドゴルフに加え、カラオケなどを妻のチズ子さんと一緒に楽しんでいます。「いろいろ経験してきたけれど、今が一番幸せ」と笑顔を見せる上本さん。手記は、こう締めくくられていました。

「多くの皆さんに愛されて、幸せな暮らしを続けています」

趣味のカメラを持ちチズ子さんと散歩

プレー中は声を掛け合い、会話が絶えない

平和の学びや交流を

市では、平和の学びや異文化交流ができる事業を実施しています。

■糸満市中学生平和学習訪問

友好都市の糸満市・網走市と合同で平和を学び、現地の中学生と交流します。

問企画政策課☎225-2050

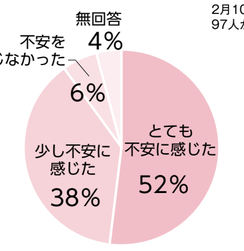
■インターナショナルティーサロン

国籍の異なる市民が気軽に集い、互いの文化を理解し合える場所を提供します。

問市民協働推進課☎225-2215

アンケート 感染症や軍事侵攻の報道などを見聞きして不安やつらさを感じましたか？

2月10～24日実施
97人から回答



声 不安の理由や命について考えたこと

- 感染症や軍事侵攻はいつまで続くのか不安でした（50代）
- 多くの人が亡くなり、自分や身近な人がそうなってしまったらと考えた（30代女性）
- 命に関わる感染症や戦争が起きるまで、深く考えたことはなかった。今の生活がどれだけ平和であるのかを考えさせられた（20代男性）
- コロナや戦争が起こる前に戻りたいと思った。早く終わってほしい（10代女性）
- 自分の子供が同じような目に遭ったら守れるだろうか（50代男性）
- 母は戦争の話はほとんどしなかった。それほどつらかったのだと思う。早く戦争が終わることを望む（70代女性）
- 病気や戦争、災害などで人の命は簡単に失われてしまう事実に、それは自分にもいつ訪れてもおかしくないと思うようになった（50代女性）
- 侵攻で罪のない人々が巻き込まれていることに、つらさややるせなさを感じた（20代女性）